

あたり前があたり前ではなかった時代

越前市武生第三中学校 3 年 高田 倫央

数か月前、私は祖父母の家で「地券」を見せてもらった。地券には私の先祖の名前や地価、土地の面積、税率などが記載されていた。「地租改正」とは、明治時代に行われた政策で、政府が土地の所有者に地価の三パーセントにあたる地租を現金で納めさせていた、ということを教えてもらった。

そこで、過去の税の仕組みについて興味をもった。江戸時代を例に見ていくと、税制は二公一民で、今までに比べて非常に高いものだった。平常時の収穫量を一とすると平常時の百姓の米の入手量は三分の一となる。さらに、この頃たびたび発生していた飢餓では平常時の収穫量の約三割程度まで減っていたので、収穫量は平常時の十分の三となった。飢餓が起きても同じ税率が課されるので飢餓時の百姓の米の入手量は平常時の収穫量の三十分の三、つまり十分の一となる。

ここで一つ疑問が出てくる。前述のとおりこの時代には非常に重い税負担が課されていたのだから、当然社会保障のような制度が整っていたはずである。しかしながら、税を負担する百姓には現代のような社会保障などなく、生活がどんなに苦しくても何の支援もない。現在では考えられないことだ。

また、この時代に「百姓と胡麻の油は絞れば絞るほど出るものとなり」という言葉があったように、幕府や藩は、百姓に生活のゆとりを残せないほど、厳しく年貢を取り立てていた。そのため、多くの百姓が重税と飢餓に苦しみ、餓死者も多く出て、全国各地で百姓一揆が勃発していた。このことから当時の生活の苦しさが想像できるだろう。

では、現代の税制を見ていこう。日本には所得税や法人税、消費税など約五十種類の税がある。現代の税負担は前述の江戸時代や明治時代に比べて断然低いというのが現状だ。そして、過去と大きく異なるのは、これらの税金のおかげで社会保障が充実しており、病気にかかったり失業したりするなどしても、国民全員が平等に安心して生活することができることだ。これは、私たちの先祖が重税に耐え、現在の税制の礎を築いてきてくれたおかげである。

このように、飛鳥時代から始まった税制は形を変えながら現在まで課されてきた。そして時代を追うごとに、より私たち国民に寄り添うものとなってきた。現在、少子高齢化に伴い、社会保障の費用に対する現役世代一人あたりの経済的負担が一層重くなることが予想されている。将来、私たちが安心して生活を送れるようにするには一人一人が社会の一員としての自覚を持つとともに、税を納めることの意義を理解し、現代の社会保障制度は私たちの先祖の苦労の上に成り立っているものであり、あたり前ではないということを意識することが大事だと思う。